心に残る映画

『博士の愛した数式』

2006年／日本／小泉堯史監督作品

純粋なる数学への情熱と子どもへの愛情，そしてその想いに応える思いやり

会員　齋藤 北写（66期）

『博士の愛した数式』
価　格：¥4,700＋税
発売元：アスミック
販売元：KADOKAWA 角川書店

制約された記憶

「僕の記憶は80分しかもたない…」印象的なセリフの一つである。天才的な数学者である博士（寺尾聰）の記憶は80分しかもたない。交通事故の後遺症で事故以前の記憶は鮮明に残っているものの，事故後の記憶はきっちり80分ごとにリセットされてしまう。そのため博士の服には未来の自分に向けたメモがたくさん留められている。

そんな博士のところに1人の家政婦（深津絵里）がやってくる。

心地よいリフレイン

家政婦が博士の家を訪ねる度に博士は決まって靴のサイズを尋ねる。「君の靴のサイズはいくつかね？」，「24です」，「ほお，実に潔い数字だ。4の階乗だ」とお決まりのやり取り。数字を愛する博士流の初対面の人とのコミュニケーションなのである。最初はぎこちなかったこのやり取りも，日が経つにつれ家政婦が博士のことを理解し，嬉しそうに「24です。4の階乗です」と答えるようになり，小気味のいいやり取りとなっていく。

映画を観ている者としては「また出てきた」となぜか楽しみにしてしまうお決まりのシーンとなっている。

子どもへの果てしない愛情

ある日，博士は家政婦には10歳の息子がおり，家でひとり留守番していることを知る。博士は母である家政婦が息子の世話をせずに自分の世話をしていることに心を痛め，博士の家に息子を連れて来ることを家政婦に約束させる。息子が博士の家を訪ねると，博士は息子の平らな頭をなでながら，「ルート」と名付けた。「√」はどんな数字でも嫌がらずに自分の中にかくまってやる記号なので，そんな寛大な心を持つようにとの願いが込められている。

博士は自分が数学雑誌への投稿で賞を獲得しても喜ばず，お祝いすることにも全く乗り気でなかった。しかし，ルートの誕生祝いも兼ねたお祝いだと聞くと一転する。「子どもには祝福が必要だ」と言って，嬉々としてお祝いの日にちをメモに残した。博士にとって子どもは絶対的に愛情を注ぐべき存在なのである。

博士の想いに応える

博士との生活はどうしても同じことの繰り返しにならざるを得ない。そんな中で，家政婦はルートに博士に対して決して「その話は前に聞いた」とは言わないことを確認する。博士の記憶がリセットされることを当然のこととして受け入れていたルートは，あたりまえのことのように応じていた。

博士の想いが2人に伝わり，2人が自然と博士を思いやる。そんな3人の関係性がとても清々しく感じられた。そして，博士の記憶はリセットされているはずなのに，3人の間の信頼関係はだんだんと築き上げられていくように思わされる。

おわりに

本作では，至るところに数学用語や数式を使った表現がちりばめられている。自然数，素数，友愛数，完全数，オイラーの公式など。これらが博士の口から語られたとき，数字は個性を持ち，見事な感情表現となるから不思議である。その詳細は是非作品を観て確認していただきたい。

本作を見終えるころにはみなさんの心にも「√」な気持ちが芽生えていることでしょう。